

鳥取県米子市に流れ込む日野川には、多くのカメラマンが被写体とした名橋「旧日野橋」があります。この橋越しに見る大山（だいせん）は、素晴らしい景色を織り成しています。

平成12年（2000）に襲った鳥取県西部地震。この地震は旧日野橋にも大きなダメージを残しました。そのため米子市は撤去の方針で検討するも、地元民の強い要望で存続が決定されました。しかし橋げたに亀裂や段差が発見され、すぐに通行禁止になるものの、平成15年（2003）3月、**国の登録有形文化財**に指定されたことで補強工事が再開され、約6年半の工事期間を経て再び開通となりました。

この旧日野橋は、延長366.6m、幅6.25mで、6連アーチの鉄橋として1929年に完成。1970年の国道9号線バイパスの新日野橋完成に伴って、国から米子市に譲渡されました。現在、再開通の後には歩行者、二輪車専用の橋として第二の人生をスタートしています。

何と言ってもそのアーチを描くグラデーションと遠くにそびえる大山とのコントラストが最高です。この風景を求め、多くの写真家が足を運ぶことでも知られています。



旧日野橋の怪談

今から約26年前のある日、川底が水流で深くえぐれた旧日野橋の橋脚付近で漁していた川漁師が、一人の女性と思われる溺死体を見つけた。死後約1ヶ月以上経過していたが、検死の結果、捜索願が出ていた母子の母の方であることが分った。その後懸命な捜索にもかかわらず、子供のほうは遂に発見する事が出来なかったそうである。

それから丁度1年後のある雨の夜、一台の白い車が旧日野橋に差し掛かった。すると橋の袂にずぶ濡れになった一人の若い女が立っている。運転手の男性は気に掛かり「どうしたの？」と声を掛けた。すると、女性はうつむいたまま、か細い声で「橋の向こう側まで乗せて欲しい」と頼みます。おかしい事を言うものかと思いつつながら運転手は後部座席に女を乗せ、橋の反対側まで送った。車を止め「ここまでのですか？」と後を振り返ると乗せたはずの女は居らず、ぐしょり濡れた後部座席には小さな子供の靴が片方だけ転がっていたという。

それから雨の降る夜、男性が運転する白い車に限り、同じ様な体験をする者が続出した。噂は瞬く間に広がり、全国から取材や噂を聞きつけた者たちが幽霊の写真を撮ろうと橋の袂にテントを張るという騒ぎにまみれてしまった。

女は何故、雨の降る夜男性の運転する白い車にだけ乗り込むのか、真相は解らないまま、いつか忘れ去られていった。それから26年後の現在、この調査にあたって一人の女性と出会う事になった。その女性によると26年前の日野橋で、ずぶ濡れになって立った女の人は、自分の母親だという。彼女は母親が居なくなった日の朝の事を鮮明に覚えていた。

「母親と父親は常日頃から喧嘩の絶えない夫婦でした。原因は父の浮気だったようです。その日も前夜から続いた喧嘩にノイローゼ気味だった母が幼い妹を連れ、家を出て日野川に妹を抱いたまま身を投げてしまいました。家のすぐ目の前にある橋なのですが、三日間続いた大雨により濁流になっていました。その時私は学校へ行っていた為助かったのです。身を投げた日も朝から激しい雨が降っていました。そして父が乗っていた車は白いセダンでした。」

話を聞いて分ったのだが、彼女の実家と私の里は2km程しか離れておらず年も同じ年、母子が身を投げた橋を境に町名が変わる為、現在までその事実を知る事はなかった。今回の調査で当時日野橋に立った女の人の真実、本名、出身地、家族構成、享年、等のデータを入手する事が出来たが、それをこの場で公表する事は残念ながら出来ない。

この世に残っていったものは夫に対する憎しみと情愛、それとも、幼い我が子を道連れにした後悔と懺悔なのだろうか……いずれにしても身を投げた母子の成仏と、唯一生き残った彼女の幸せを願わずには居られない。

(2008年11月28日の投稿記事より)